

昭和十七年渡満、公主嶺にて缶詰工場の建設に従事

昭和十九年、徴兵検査合格、入隊

昭和二十年九月、入ッ

昭和二十四年八月、復員

昭和二十五年四月、福田中学校へ教員として奉職

昭和六十一年三月、加古川農学校を最後に定年退職

退職後は地元地域社会において社会教育事業に従事。

昭和五十四年、全抑協兵庫県連合会が発足すると同時に加東郡支部の役員として活躍していただいている現在です。

(兵庫県 上月 光男)

私のソ連抑留回顧録

和歌山県 河端 亨 之

私は、那智勝浦町大字庄六二二(旧、下太田村庄)

で、父・河端乙一、母・いさの、の長男として大正十一年六月二十三日誕生しました。私の上に姉が三人お

り、男子出生とあって家族全員に祝福され、特に祖母には甘やかされて育てられました。弟姉妹と言えば、私の後に生まれた男子五名と外に女子五名の計十一名、両親と祖父母との大家族でありまして、父母の苦労は並大抵のことではなかったように推察いたしております。

学校関係については、地元、下太田小学校を卒業、上・下・太田組合立太田実業学校(旧制乙種農業学校)を卒業、日高郡南部町、県立紀南農業学校二年に編入され、昭和十六年十二月二十七日に当校を繰上げ卒業になりました。この年、昭和十六年十二月八日は、大東亜戦争に突入した日であり、当日は紀南農業学校の和歌山六十一連隊長の査閲があったことを思い出します。その後昭和十七年一月四日、和歌山県庁職員に採用され、耕地課勤務となり、次いで昭和十八年九月に日高川沿岸農業水利事業所に転じ、県営事業日高川堰堤(頭首工)として着任した。

昭和十九年一月末日、県職員を現役兵として入隊のため退職しました(当時、県職員は召集の場合は現職

のまま出征とし、現役兵として入隊の場合は退職扱いとなっていました。昭和十九年二月十日、満州、山砲第八七二部隊の要員として、大阪府下信太山の砲兵第四連隊（砲庫）へ入隊し、二月末日に満州国、牡丹江省林口の兵舎に移動後は、第一大隊第二中隊に編入され、軍隊生活が始められた。初年兵教育から峻烈極りなき戦技訓練が重ねられたのです。

昭和二十年三月末ごろから「サ号演習」という名をもって満州全地域に及ぶ部隊の大移動が実施されたよう、林口山砲本隊は、九州宮崎県へ移ることになったが、私は牡丹江省樺林に新設された歩兵第二六七連隊第二中隊に転属を命ぜられ、その二カ月後の五月末、鏡泊湖付近での陣地構築に駆り出された。しかし、この陣地構築中に、部隊命令により東安省斐徳にある関東軍直属の第九遊撃隊に一二八名の兵員を引率して転属した。

斐徳で過ごしたわずか一カ月余り、特訓後の八月九日、夜の七時ごろに、遊撃隊長眞壁少佐のもとに出陣式を行い、私は大隊本部の命を受け後衛隊として伍長

二名、兵四十名を引率、十日午前四時ごろ東安に向かつて出発したのであるが、八月九日の夜の薄暗い東の空に黒煙が高々と猛烈な勢いで上がっているのが見え続いていたが、それは斐徳から約五十キロ以上もある遠距離の虎頭陣地のものか虎林陣地のものか定かではないが、多分ソ連軍の不法侵略による攻撃が突如として現実を開始されたためであろうと瞬間に思った。

西東安駅に着くと貨車が止まっていたので飛び乗った。無蓋貨車上には、東安付近の開拓地の人たちや兵隊たちで満員となり出発した。車上は賑わしい雑談で少し心和む気はした。このようにして出発したものの、私たちは第九遊撃隊本部と合流することはできなかった。

出発して五つ目の永安駅でソ連空軍機から爆撃を受け、列車は止まったままになり、幸い機関車は直撃を免れたが動かない。見たところ、機関車の間近前方に半径五ないし六メートルくらい、深さ二メートルくらいの大きな穴ができていた。

列車から降りて近くの駅へ逃げ、駅の庇の下に隠れ

ていたが、前上方からの飛行機による機銃掃射を受けたため、敵機が私の真上に来たとき、樹木の根元に駆け込み、太い幹を回り逃げしながら、敵機の飛び去るのを待ちました。

その空襲のために、同じ貨車に乗って来た同胞たちは皆バラバラになり、南方面か西方面にある林口方面へと別れ別れになって歩きだしたのです。このときは、私の所属するはずの第九遊撃隊への合流のことなど諦めて、地図もなく磁石もなく、太陽と月と北斗星を頼って南の方向に歩くことにした。仲間は九名であった。

思えば東安省の永安駅から、結局は私たちの集結地となっていた吉林省敦化までの約四百キロ、五十日間に及ぶ逃避行は、八月九日のソ連軍の侵攻に始まり、若いころの苦難の歴史の一ページとなった。ある時は湿地に入り、畑の中、山の中を歩き、なるべく道路や人の住んでいる部落を避けて歩くのである。このように、努めて迂回しながら歩き続けて九月下旬となってきた。夜は次第に寒さ厳しくなり、特に食事は、思うようにならないことは悲痛の思いであった。

このころ、日本人と思われる人と会う機会もなく、次第に心細い感情になってきていたのは、当時の気持ちそのままであると言えます。

東安省の永安駅での空襲の時から、満道付近か鶏寧近くの山裾を歩いている時に見掛けたのは、近くの車道を満人の操る馬車に元我々の兵舎のあった倉庫から被服や食料品などを満載して、四十、五十台もの運搬車が移動しているのを見受けたし、満人や朝鮮人部落には、この二、三日の間に、赤い布が掲げられているのも見受けられるようになっていた。実のところ、この様子だと、もしかや負け戦になっているのではないかと思いました。

毎日歩く所はほとんど湿地や山の中で、体も疲れがひどく、湿地に軍靴のままの足を入れて、お互いの頭を中心にして寝たり、山頂で寝たりでした。

あるとき、満人の部落から離れた一軒家を見つけて尋ねたところ、白系のロシア人で、五十歳くらいの婦人がおり、快く私たちの世話をしてくれた。そして朝食や夕食まで御馳走になった。この家の主人は既に故

人となっていて、壁に、写真が飾られていて、帝政ロシア時代の陸軍佐官の肩章をつけていた。一人息子は現在ソ連に居住していると話していた。彼女の気持ちは息子を思う親心というか、我々には特に親切にくれたように感ぜられた。感謝の気持ちと一緒に、故郷を偲ぶ心が共に複雑な思いでありました。本当に幸せな一ときを過ごさせてもらった思い出として、今も忘れられない。後ろ髪を引かれながら、また、心に鞭打ちながらの出発であった。昼間は満人や朝鮮人たちの不穏な気配がなんとなく感じられるので、お互いに注意しながら単独行動はしないよう話し合い歩き続けた。

夕方から朝までの間は所々で小銃や軽機銃、またある時は野砲、山砲の発射音が遠くから響いてくるが、わが方の仲間は九名、小銃が一挺あるのみでは、どうしようもない。ただただ、迂回して歩くだけであった。林口付近の山中では、砲撃戦の跡地であろうか、馬蹄型に砂糖袋を積み重ねて土囊どぶくろにしているのを見付けた。砂糖を少々靴下に入れて持つことにし、食べても

みたが、砂糖だけでは腹の足しにならず、満腹の感じは得られなかった。心残りしつつまた出発した。

小白山山脈の山中以外は、部落の外周や山裾を歩いたが、林や森の中は歩きにくく苦勞であった。しかし山頂付近は「ケモノ」道になっていたので割合に歩きやすく思えた。

食糧については、少人数で行動しているのも、トウモロコシ畑に入っては、それを頂戴し、西瓜畑では西瓜や瓜をいただいた。米やパンは手に入りにくいし、火を通さねばならないので、トウモロコシや瓜類などで空腹は凌ぐことはできた。ある時はまた標高百メートル程度の山頂に赤松が育成していたので、あるいは松茸でも思ったところ匂いを感じたので捜してみると、近くで三十本ほど立派な松茸を見つけた。入れ物がないので、ちょうど満人のかぶる膏肓立を兵隊がかぶっていたのを見つけた、それに入れて持つことにしました。暑い日中を一時間ほど歩いた所に、木製容器に蜂蜜が一杯入っているのを見つけ、失敬することにし、飯盒二個に入れて、それも持って運ぶことになった。

やがて都合よく無人の作業小屋があつて、飯の宿とすることにしました。早速松茸を焼き、蜂蜜の中にどっぷりと漬けて皆で喜んで味わいました。ところが、どうしたことか食べてしばらくすると沖縄出身の島袋上等兵が腹痛を起こし、夜中一睡もできずに朝を迎えた。昨夜食べた松茸が焼き足りなかったところがあつたための食あたりだったのだろうか、などと思いながら出発の支度にかかることにしたが、島袋上等兵は、皆と一緒に行動できないと言ひ出した。彼の言うには、多少私は満語が話せるから何とかなるので、皆さんは前進してくれと。皆で相談して、残しておくわけにはいかないという結論であつたが、彼は頑固に我々の言い分を辞退するので、やむなく後ろ髪を引かれる思いで別れてしまった。心に残ることであつた。それからトウモロコシや山セリ、岩塩と水を飲みながらの食生活が続けられたのです。

ある日のこと、山を下ったとき、場所やその人の名前などはわからないが、単身の陸軍中尉が山の中腹の大樹の根元を掘って軍刀を油紙で丁寧に包み土中に埋

めていたのを見た。彼は戦争が終わったら掘り出しに来るのだと話していたが、そのまま別れてしまったので、その後のことはわかるはずもない。また、濱江省と牡丹江省と吉林省との間の小白山山脈の中で、木の根元の所を短剣か刃物で日本人〇〇〇〇と、二人の姓名を刻み、「此処に自力する」と彫り刻んでいる木を二カ所、目にすることがある。

そのころ、私も極度の疲労に達していて、大きな倒木（長さ二十メートルほどで直径一メートルくらい）が道を塞いでいたが、その木を跨ぎ越す力すらなく、くぼみを見つけて潜り抜けなければならないような衰弱状態で、血便も出るし、もはや我が身ではない思いで谷川や畑、林を下流に向かって無心で歩いていった。同僚たちも同様の状態になっていたようである。体力の限界にきていたのであろう。そこは鏡泊湖に近い所に思えた。

九月下旬に、私たちは東安省の永安駅から歩いて約三百七十キロの地点に達していたことになるが、今にして思えば、そこは牡丹江省南湖頭であつた。極限に

達していた体を引きずるようにしてソ連軍の分哨と思われる所に出頭し、武装解除されたのである。

八名の仲間で小銃一丁だけである。私は何も捕られる武器もなく、入宮の時に和歌山県知事より戴いた「祈・武運長久」の日の丸一枚のみであった。それらの事を済ませて、その後はソ連のトラック（米国製）に乗せられて、約三十キロを走って吉林省の敦化（とんか）の集結地に送られたのです。集結地の入口に新品の軍服を着た若い人が多くいたので聞いてみると、敦化付近の日本陸軍病院勤務でいた看護婦たちであるとのことであつた。彼女たちに比べ我々の軍服は破れ果てた夏物ボロボロの軍靴である。これが敗戦兵士たちの姿であつた。十月二十四、五日ごろまで敦化飛行場近くのパルプ工場の機械部分の解体、列車積み込みなどの「ソ連送りの作業」使役に従事させられた。その仕事を終えた後からの私たちの行動は、すべてソ連側の言い成りにならなければならない状況になっていたようでした。

第一には、敦化から牡丹江駅まで一週間くらいの強行軍である。一日四十キロの割合になる。この二百八

十キロの強行軍も、つらい若いころの体験として今生きているように思う。牡丹江駅より「ハルビン」「チチハル」「ハイラル」「満洲里」を経由してソ連領に入る。「チタ」を通過して、「イルクーツク」で休憩し、バーニヤに、久しぶりの風呂に入れた。それも風呂に入れたとは名ばかりで風呂桶に一杯のみの湯であつた。それから更に貨車に詰められタイセットへ。その分岐点から最終の地点で五十三キロから五十六キロであると云われる「ネーベルスカヤ」の収容所に入った。

収容所には一個大隊を千名として四個大隊が収容されていたように思える。牡丹江を出発するときは大隊長、中隊長の名も知らなかった。ソ連収容所では阿部少佐が大隊長ということであつた。収容所はバム鉄道の最終点であるため、「OTS」「TTS」と言つて、鉄鋼関係、機械、土木工具、木材関係の工具など、ソ連の物資とか満州からの分捕り品（満州内での各工場の資材や機械その他）、雑貨の集積・地区収容所への雑穀物の配送などの雑役をやらされていた。二十一年三月末ごろまでは作業らしい作業はなく、私の場合は

三個班の一班として二十名を引率して作業に当たったが、多くは「TTS」とかいいう鉄鋼材や工具関係の倉庫の整理整頓であった。

全く驚かされたのは、満州からの戦利品の多いこと、十五HP焼玉エンジンが百台以上もあり、それらも整理したし、他にも「OTS」という被服や穀物倉庫が収容所に隣接して並んでいて、そこにも作業に行くと、それらの倉庫に並行して引込線に貨車が六両から八両分（六十トン車）入ったら、一両につき各幕舎から一個班二十名を出役させて卸下する作業の競争をさせられたものです。その外、主な仕事は、木材を運んできて炊事用に又は各幕舎（これも独ソ戦当時の戦利品だという人もいた）のストーブの燃料として薪を作る仕事であった。

春三月ころまでは本格的な作業もなくノルマについても特にやかましく言われたこともなく、営倉に入れられた経験もなかった。

私たちの最初の収容所であった「ネーベルスカヤ」は、鉄路に平行し、四方に有刺鉄線を二重に張りめぐ

らせ、四隅に高い望楼の監視台があつて常時監視兵が上っていた。収容所に入ってからには徐々に栄養失調の死亡兵士が出るようになって葬った。

私の幕舎内では熊本県とか長崎県の九州出身者で二十年五月ごろに来た徴兵繰上げの初年兵が多く、暖かい九州から春五月の満州での経験だけで酷寒のシベリアに送られて来た上に、十分な栄養食も与えられずのままに、耐寒力を養う間もなく、多分犠牲になったものと思います。同じ幕舎内においても満州の氣候に慣れた人や軍人は、入ソ以来の寒さを経験しても、ある程度の体力として抵抗力があつたから生命を維持できたのであらうと思われます。

その後、二月末ごろ、食料も不足がちとなり、食事の量を多くするために高粱の粥を更に水を加え食べさせられたものです。私は、そのような生活を続けたある日、ペチカの上の飯盒の水を沸騰させ、二階の自分の席に上げてもらつたときに、薄暗い所で手前に引き寄せようとして誤って飯盒の熱湯をひっくり返して、両足の甲の上からひつかぶって大火傷をしたこと

がある。軍足を履いていたがダメであって、皆にお世話をかけたことがありました。収容所の医務室の病室で両足を吊り上げられて治療を受けたが、治療と言っても消毒薬で清め消毒するだけのことを繰り返すだけであつた。

その入院中に私の見たことは、病室の一隅に同胞の屍体を井桁に組み二十体ないし二十五体はあつたように思う。三月末までの間に、四大隊収容されていたはずであるが、少なくとも三百名以上の犠牲者が出ているのではなからうか。しかし、我々の幕舎では、一度も墓地作りや穴掘り埋葬とかなどのような作業に出ることはなかった。次の移動後は、気候も暖かくなつてきたので犠牲者も少なくなつたことと、慣れというか寒さについても次の嚴寒期を迎えることに對する習慣性が、いつの間にか皆の心身に養われてきていることもあつて、死亡者も少なくなつた理由の一つであると思われまふ。

私たちがここに収容され、働いてきた作業は、工作工具や機関関係の倉庫係と、食糧倉庫の雑役と、収容

所の炊事用、幕舎の暖房用の薪取りなどであつたが、ノルマについては余り言われたことはなかつたし、また監視の「カンボーイ」も山林の往復には「ダワイダワイ」とか「ブイストラ」とかの連呼はあつたけれども、作業中は余り無茶は言わなかつた。ただ、毎日の事であるが、収容所の門前、衛兵所の前で、五列縦隊に並んで点呼を受けるのであるが、冬の寒さに凍えながら朝の暗い時から人数を数えるのに一回や二回で済んだことはなくて、正直、数に弱いのか、数え間違ひが多くて、それが、たまらない苦痛に思へたし、長時間を要するために凍傷にかかる兵隊もあつたほどである。

幕舎内での生活は、満州同一部隊の者たちではなく混成した兵隊とか、「小グループ」の兵士らの集まりで、上下関係の階級意識は皆無で、制裁とかビンタなどは全くなかつたことは幸いであつた。この収容所での食事状況は、雑穀（高粱の赤黒い精白していないもの）をドロドロに煮たお粥と黒パンが主食で、魚や野菜などは見たこともなかつた。塩はお粥に入っている

が、砂糖・油・動植物・煙草などの配給も全然されなかった。四月になってから二回目の移動があつて別の収容所に入ったが、食事についても宿舍内の規律関係なども何ら様変わりもなく、作業に就いての賃金とかな率給なども一度ももらつたことはなかった。

次に三回目の移動であるが、大体千名くらいの収容所で、主な作業としては、バム鉄道の路盤の造成と、それに関連する作業であり、一部、森林伐採や製材所の作業に従事した。その外は「コンクリート管」の製造、「基礎工事」、「排水溝作業」、「揚水機の屋舎建設」などであつた。

私がここで従事した第一の仕事は、伐採された原木の、内地の杉や檜のような真っ直ぐな赤松や根元の大きな落葉松が多いので、それらを五メートル〜六メートルの長さに切り馬車で運んだ、それを製材所において足場板や角材に挽くのである。

赤松は挽きやすいので、ストックがなくなるとまた、頃合いを見て落葉松のラッパ状のものを製材所に運んできてもらつた。製材所では、硬い木やラッパ状の落

葉松には難儀するし、二人引きの鋸で挽くには意気投合できなかったら大変苦労します。それらの采配については、作業隊長の私の方で適当にやつたものです。

次のコンクリート管の製造ですが、直径一・五メートル、直高一・二メートル、厚さ十五センチの管を作ることでした。それは小屋を建てトロツコの上にコンクリートの型枠を組み、図面に基づき配筋も完全に、コンクリート配合も、打ち込みも、すべての作業を入念に実施したものだから、品質や出来ばえは十分なものであつた。

次にやらされたことは、基礎工事というか、幅三メートル、長さ十二メートル、高さ三・五メートルの穴を掘り、コンクリートを打ち込む、基礎地盤を造る作業である。周囲に掘つて小屋を建て、外周に背板を張つて隙間を粘土で目張りして外気を遮断し、室内でペチカを焚いて温度を上げて、掘つた穴にコンクリートを打ち込むのである。外気は零下三〇、四〇度です。通常の処理作業では、よい結果の出るものではない。水、砂、砂利もすべて鉄板の上で加熱し、セメントを加え

ながら更に加熱しながら小型角スコップで練り上げて打設して行ったのである。三交代で、何日間作業したか、熱中の余り忘れて記憶は定かでないが八時間当たり四十名か五十名であったか、加熱する者、練り上げる者、打設する者、真剣な仕事の連続であったことを思う。

かような作業状況の中で、要員の交代時に監督が来ては地面からの深さやその他を測定して、グループの作業量を割り出しては、「ハラショ」とか「ニエハラショ」と「ラポーター」の成果を評価していたが、ソ連の監督も適当なもので、食事とか何かの用かで、官舎に帰って不在になるときは、我々もこの時とばかり適当に休みながら仕事を続けたものです。この基礎工は質も悪く、完全とは思えないけれども、三・五メートル以下の土壌は凍らない、という水道管工事の実証もあるので、凍土となって鶴嘴を受けつけないような凍土を掘り起こしてコンクリートを打設するような作業は、する必要はないように思った。せいぜい一メートル二十センチの深さに掘り、その深さまで良質なコ

ンクリート打設し施工すれば良いことだと思います。

前に書いたように水道管の埋設作業に当たったが、長さ五メートルか六メートルを幅一・二メートル全面に焚き火をして、土壌を温めておくのです。初日に十センチくらいを掘り、帰りに付近の山林から木の枝や枯葉を集めて焼き、いったんは帰り、翌日そこを掘鑿すると二十センチも三十センチも掘ることができます。その後、中間の段に板を架けて深度を下げる。三・五メートル以下は凍土であっても溶けているので穴を穿って隧道を作った。とにかく、早く能率よく作業を進めるためにいろいろと工夫したが、水道管を入れるまでの作業だけで終わり、完成できたのか、しなかったのかは知らないままで、それを見守ることもなく中途で他の作業に移った。

次の作業の話は、少し時期を飛ばし、排水溝を作る作業でした。季節は夏で暑い日である。湿地の中で二百メートルか三百メートルの間を、一・五メートル幅で深さ一・三メートルくらいの排水溝を構築した。地質は凄い粘土質のため、スコップに粘りつく、そこで

焚き火でスコップを焼いて温めながら掘り起こすのです。太陽の暑さと焚き火の熱と、それに加えて「ブヨ」という小虫が顔面に飛んで来る、たまらない気持ちだ。それで蚊帳のような物を帽子の上にかぶり悪戦苦闘したこともありました。

次は揚水機の屋舎建設に従事した時のことです、幸いなことに内地で本職左官の人がいたので、その人の指揮の下で工事が楽にできたことがあった。また、バム鉄道の本筋の工事で路盤の盛土のため一輪車の「ターチカ」で土を運搬するのであるが、私は「ターチカ」で細い足場板の上を歩いて土を運搬するのが特に得意の仕事のひとつで、作業は意外にうまく進捗したものです。ある時、路盤の盛土も概ね完成し「レール」敷設作業も奥地に移動したころであった。夜間呼集がかかり、十五トンの無蓋貨車が十両ほど近くの線路に來たので土砂下ろしを命ぜられた。一両五十名で担当し、車両の片側を四十センチほど持ち上げて、傾けて一分も掛かるか掛からない間に下ろしたこともありました。お互いに持っている智慧、力、技術などを

出し合って作業を順調に進め、成果を得たりしました。私は、二十年十一月中旬にタイセット地区ネーベルスカヤその他二カ所の収容所に移動したが、労働の厳しさに屈することなく過ごしてきたが、思えば、食事についてはどこの収容所も変わらなかったことである。とにかく、四年間にわたり、四度の正月を迎えたが、一度も米の御飯でお正月を迎えることはなかった。四年余の抑留生活は「高粱のお粥」のシャブシャブと「黒パン」でやっと生命を繋ぎ得てきたのであるが、それだけでは栄養不良になって倒れる者がいたのは事実で、当初のネーベルスカヤでは、春四月までは厳寒の雪の中で野草や「きのこ」を採ることもできず、特に栄養失調症状の者が多く出ましたが、私はそれほどのもなく過ごせました。二回目の移動のあったころからは、春芽時の山、野で山菜や野草、それに「きのこ」も「木の芽」も採れましたので、毎日の同じような食事に少し色を添えたことになり、栄養補給の足しになったようですし、寒さから解放されたことの「生活の慣れ」というものであろうか。

次に、我々の入浴のことだが、最初の四千人もの収容人員がいたころは二カ月に一度しか順番がこなくて、シラミも多く難儀しましたが、収容所が変わるたびに人員も少なくなつて、入浴も二十日に一度くらいは入れるようになったので、シラミも前に比べて少なくなつた。しかしお互いによく耐えたものだと言へながら思う。

私の収容所でも昭和二十二年五、六月ころから民主教育というか共產主義の教育が始まつた。アクチブ（積極分子、民主運動指導者）の連中が各宿舍に遊説に回り、ソ連共産党小史と唯物論の講義などが行われた（他のラーゲルについては知らないが、私がいたラーゲルでは、演芸会とか芝居なんか全然なかったように思う）。アクチブたちの話を聞いていたとき、すべての者が本当に共鳴しているのかと疑つたものである。

私の連れて行かれたタイセット地区の収容所は三カ所とも満州での混成部隊とか又は部隊が終戦後、無統制となつて、そのまま散り散りになつて満州での収容所において作業大隊として編成されたものと思う。最

初収容されたネーベルスカヤに入つたときに思ったことは、十一月中旬のことであり、雪が降り、これから厳寒に向かう折、食事ができない状態にまでして、収容所から脱走、逃亡などと無謀なことを考えることもしなかつた。それもシベリア東部で満州の近くであるか満語が上手に使えたならともかく、逃亡など考えることなど、あり得なかつた。また、ソ連側にしても抑留者を思慮分別なく殺戮するようなこともできないであらうと思つていたし、よしんば、それができたとしても、皆一緒にやられるのであれば、諦めることもできたと思ふ。私は、私なりの苦勞は経験してきたが、それはそれとして割合に楽天的であつたと思ふ。

本当のところ、私は徴兵検査以降、現在でも変わらず体重は六十五キロぐらいであるが、抑留中の最低体重は五十キロほどになった時もあった。それほどに抑留中の苦しさは筆舌に尽くすことはできないことであり、特に栄養維持のことについては、私事だけではなく、抑留者全員が一日も忘れてはならない最大の重要課題であつたが、ソ連側当事者の政治上の認識の不足

と収容所への中央指令の不備については、事ある度に思い知らされました。

抑留中は、北は北海道、南は沖縄に至るまでの全国津々浦々の出身者と生活を共にした。極寒中、作業中、休憩中、宿舎での会話は、いつも食べることが大部分で、他の話題は少なかった。思うに、何と言っても、我が身が大切だということではなからうか。終戦後の混乱の中で、我が子を他人に託して自分だけ祖国に帰った母親があったり、我が子を殺して逃げ帰った母親があったのを私が帰還後に耳にしたが、互いに究極の場にあるときの人間の心境を思うと、今更に自分が恐ろしい感に打たれる思いです。

一九四九年（昭和二十四年）七月下旬にラーゲルで祖国帰還の報を知った。元々の着た切りの私であるから準備なんて何もない全く簡単なものである。特に思うことは、タイセツト地区では、概ねこの八月には各収容所ともに帰国の報を受けていたのではなからうか。八月の初めころにナホトカの収容所の幕舎に入った。二十二年五、六月ごろから収容所での民主教育の復習

というか洗脳教育にアクチブたちは大車輪の活躍であった。私たちの、このナホトカでの幕舎生活は、一週間くらいであろうと考えて、彼らアクチブの共産化運動に誓い、スターリン万歳を唱えた。それは当時のナホトカでは反動的な者は再び山奥の収容所へ送り返されるという何となしの噂を聞かされたが、本当かどうかは定かではない。

八月七日午前中であつた。乗船するためのソ連側最後の人員点呼があり、乗船者名簿がソ連将校の聞き取り難い日本語で読み上げられ、順次、「信濃丸」と確かに船腹に示されてある日本の船のタラップを上った。タラップを上り切った所で、日本の看護婦さん四、

五名と船長か上級船員に迎えられ、船上の人となった。日本海は波もおだやかであり、船内生活も平穩。船の食事の美味かつたこと、四年ぶりの米の飯、それも腹いっぱいいただいた。この味わいは一生涯忘れない。舞鶴沖合から湾内を航行中は上甲板に出て周囲を見回していたが、沿岸の綺麗な風景とシベリアの松林の単純な景色を比較すること自体無理というもので、感無

量の気持ちで胸を締める。かくして午前九時ごろに「信濃丸」は錨を下ろした。胸を撫で下ろす一瞬であった。

平棧橋に上陸してやっと日本の土を踏みしめることができた。時は一九四九年八月九日のことでした。引揚援護局引揚寮での入浴や散髪、消毒を済ませ、援護局の調査官にソ連ラゲルの移動とか作業内容、その他種々の調査を受けた。また、支給品の受給とか、軍人としての四年間の俸給ももらった。貨幣価値も感覚もまるっきりずれている私は、思わぬ大金を頂戴してびっくりしました。売店で売っている食物や煙草代の高いのに二度びっくり。

舞鶴駅から婦人会の皆様方に見送られ汽車に乗った。和歌山に到着した。和歌山市も戦災ですっかり変わっていた。民生部世話課に引揚げの報告と必要事項の調査を受けました。帰国した県出身者二十人くらいは共產党に入党すると言っていたが、その人たちと別れて夜行列車で故郷に帰ることとなり、東和歌山駅前に迎えに来てくれた弟と一緒に食事をということで一

杯飲んだ。好きな酒であるが、コップ一杯か一杯半で酔ってきた。五年余り飲むことがなかった酒である。酔いの回るのも早いようだ。夜行列車に乗り込み八月十一日懐かしい郷里下太田の家にたどり着いた。

さて帰ったものの仕事もなく、土工や線路工夫の賃仕事に汗を流したが、生き甲斐のある汗だ。昭和二十四年県庁職員採用試験を受けて合格したが、再採用されるまでの間一カ月ほどは有田郡のみかん農家に蜜柑採りを手伝いに行った。翌二十五年一月県職員として採用されて、東牟婁地方事務所農地課に勤務することになりました。六年間の軍隊と抑留との空白があったので昇任や昇給とかの差があったことは事実であるが、考えようでは軍隊や抑留中に亡くなった人たちのことを思うとき、生きていることは良しとしなければなりません。

今七十三歳と年齢を重ね、体は順調とは言えないが、長い公務員としての勤務を終え、現在は平々凡々として暮らして行けることを思うと、ただただ「幸福」を感じずるのみです。

最後に、嚴寒と白夜のシベリアの地に幾万もの友が病に倒れ、飢えに苦しみながらあの世へと去った戦友を思うとき、言葉ありません。黙して御霊の御冥福を祈りつつ筆をおきます。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十二年六月二十三日生

現住所 東牟婁郡那智勝浦町宇久井五四九―二五

入隊前の職業 和歌山県庁職員耕地課勤務 昭和十九

年一月末退職、現役兵入隊のため

入隊 昭和十九年二月十日 満州山砲第八七一部隊

(牡丹江省林口) 要員として大阪府信太山 砲

兵野砲第四連隊に入隊、二月末林口兵舎に入る

終戦時の所属 関東軍第九遊撃隊(東安省斐徳) 昭和

二十年七月下旬

終戦時の階級 軍曹(候補生)

終戦時の居所 牡丹江省近辺の山の中

ソ連軍の指揮下に入った場所 牡丹江省鏡泊湖南湖頭

吉林省敦化

入ソの経路 敦化―牡丹江―ハルビン―チチハル―ハ

イラル―満洲里經由チターイルクーツク―タイ

セツト

入ソ日時 昭和二十年十一月五日

復員 昭和二十四年八月九日、舞鶴

復員後の職業 昭和二十四年十一月県庁職員採用試験

に合格

昭和二十五年一月三十日から東牟婁地方事務所農地課

勤務となる

昭和五十五年五月退職、現在に至る

(和歌山県 橋本 義治)

生き地獄から生還して

広島県 難波 繁男

戦局が次第に不利になり、昭和十九年ごろから在満
在郷軍人にも召集令状が来るようになり、私にも二十
年五月、とうとう召集令状が届き、満州海城四五一部